

『フェンスレス』オンライン版（第三号）●特別付録 資料2

## 「小林多喜二全集」の歴史（貴司山治） あるときの小林多喜二（徳永直）

附・総目次『小林多喜二全集（月報）』新日本文学会・小林多喜二全集刊行会編

一九四八年に刊行が開始された戦後初の『小林多喜二全集』は、今

日につづく「多喜二全集」の基礎となつた全集である。小林多喜二全集編纂委員会（初回配本・第二巻奥付では「小林多喜二全集刊行会」）が編集を行い、新日本文学会から発行、日本評論社から発売された。委員会のメンバーは江口渙・勝本清一郎・貴司山治・窪川鶴次郎・藏原惟人・壺井繁治・手塚英孝・中野重治・宮本顯治。当初、全十一巻別冊二巻の予定で刊行が開始されたが、実際には第九巻までしか刊行されていない（最終配本＝第八巻は学芸社発売）。

この全集の月報には、多喜二と直接に交流のあった作家たちのエッセイが多数掲載されているが、今日では参考が困難な資料となつていた。幸い、浦西和彦氏が収集された八回分の月報を参考させていたくことができたので、その目次を以下に掲載する。また併せてその中の二編を紹介する（漢字を新字体に改めた）。

貴司山治「小林多喜二全集」の歴史は、戦前版多喜二全集についての貴重な証言である。多喜二作品を守り、後世に伝えようとした貴司の努力については、中野重治が「人間のほんとうの積極性」（『書かるべき小林伝について』）という言葉で表現している。戦前版および新日本文学会版全集の編纂経緯と貴司の関わりについて詳しくは、伊藤純氏の論文「小林多喜二全集の編纂過程」（『立命館言語文化研究』二三巻三号、二〇一二年）および「小林多喜二全集」の編纂過程（『戦前編』）（『フェンスレス』創刊号、二〇一三年）を参照されたい。

徳永直「あるときの小林多喜二」は、上京直後の多喜二の面影である。気がつけば労働者たちの間に溶け込んでいる多喜二に対する羨望のまなざしさえ感じられる文章であり、そのような記憶をとどめていたということも含めて、徳永直という作家の観察眼や、二人の人

間性が表れているようで興味深い。

月報（一）の宮本百合子「小林多喜二の今日における意義」は『宮本百合子全集』第十三巻（新日本出版社、一九七九年）に、月報（三）のなかの「しげはる『感想と思ひ出』は『中野重治全集』第十八巻（筑摩書房、一九七八年）に収録されている。現状では第九回の月報は確認できていない。情報をご存じの方は本誌編集部までご教示いただきたい。

（編集部）

## 「小林多喜二全集」の歴史

貴司山治

1

小林多喜二は一九三二年（昭和七年）四月ころから非合法生活にうつつで、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）の書記長として、又その上級機関である日本プロレタリア文化連盟（コツブ）の責任者として、かつ日本共産党員として、一年たらずのあいだ、プロレタリア文学・文化の指導のために活動した。（こんどの全集の評論集（二）に収めたのはみなその時のかれの活動をあらわす論文である。）

そして一九三三年一月二十日、小林は、この論文にあるようなかれ

の活動をにこんだ日本政府の警察のために、残虐目もあてられないゴウ問によつて殺された。

二月二十四日、友人・家族により辛うじて葬式をすましたあと、三月十五日の築地小劇場における大衆的な小林芳農葬までのあいだに、ナルブ中央常任委員会では「小林多喜二全集」の刊行を決議して、四月には「蟹工船」「不在地主」を収めたその第一回配本（第二巻）を出した。

一方、コツブでも小林芳農葬記念事業として、かれが命をかけてたかたの時期の論文（本集収載のもの）をあつめた「日和見主義に対する闘争」一巻を出版した。その他、五月には、私共の企画により組織外において改造社から「不在地主・オルグ」「地区の人々」「蟹工船、工場細胞」国際書院から「転形期の人々」九月には遺稿の部分をふくめた「転形期の人々」を改造社からそれぞれ刊行した。これらの総刊行部数は十数万に上つた。

以上の活動は、小林の虐殺に対する当時のプロレタリア文学運動からの逆襲として、計画され、実行されたものである。

## 2

その後、コツブでは「小林多喜二全集」刊行の意義を評価して、これをナルブからではなく、コツブから出すべきである、と決議して、全集発行の仕事をコツブへうつすことにきめた。

ナルブ中央常任委員会が、コツブのこの決定に不満をもつたのはやむをえない事実であったが、決議を承認して第一回刊行以後の仕事をコツブへ引きついた。

しかしこツブはその時うちつづく弾圧によつて共産党同様の非合法状態におかれ、つぎつぎに働き手は検挙され、活動は思うようにな

らず、小林全集の継続刊行はいつまでたつても実行にうつせず、そのままではお流れになつてしまいそうであつた。

一九三三年の初夏、私は共産党中央部の幹部として活動していた宮本頸治から「小林多喜二全集の発行は党中央委員会の仕事として行うことに決めた。自分が中央委員会から委任をうけて処置することになったので、君が合法面でのその仕事の責任者となつてやつてもらいたい。」

との相談をうけた。私は、ナルブからコツブへ、コツブから党中央委員会へと、だんだん高いところへ、小林多喜二全集の計画をもち上げて行くことは大へん結構だが、計画を実現するには逆の方法をとらなければならない、ということを宮本に強調した。宮本は、だまつて私の意見をきいた上、私のやり方に一任した。

私は、六十何人のプロレタリア文化人やその他の自由主義的、進歩的文化人をあつめた独立の、大衆的な小林多喜二全集刊行会を設立して、一九三三年の夏から秋へかけて、前金と基金の募集を行い、「党生活者」の伏字なし、原文どおりの組版を終えた。しかし、プロレタリア文化団体は、その時もはや四分五裂の状態で、基金、前金合せて三百円余り集つたが、刊行は不可能であつた。

刊行会が党中央部（宮本）に直結した合法活動だと気づいている者は幸いに一人もなかつたが、この仕事やらそのほかの、当時の党活動への協力やらで、たえず宮本と連絡して仕事をすすめて行く内に、協力者としての池田寿夫がやられ、杉本良吉がやられ、ついに宮本頸治もまた検挙されて、私は合法面にとりのこされてしまい、どうすることもできなくなつた。その内に私も亦検挙されてしまつた。（この時つづいた「党生活者」の紙型はいまものこつていて一九四六年に大阪の民衆書房から出版した「党生活者」の紙型がそれである。）

一九三五年に、私は幸い又自由をとりもどしたので、一存でやはりこの「党委託」の仕事をつづけることにきめ、ナウカ社を発行所として、小林多喜二全集を小説だけ三冊、論文はどうしても出せそうもないでのこし、代りに書翰集、日記各一冊を編纂して、合計五冊を刊行した。この発行部数合計約二万である。

この最後の努力は三四・三五・三六の三年ごとの仕事となつた。

このころは、もう小林多喜二の本を出す仕事などには相談にあずかってくれる人もなく、多くの旧ナルプの文学者たちでも、こわがるか、いやがるか、でなければ無関心であつた。おかげで私はこの仕事をひとり占めにすることができる、ずいぶん楽しかつた。もつとも、この仕事が「党遺託」の仕事であるのを知つていた中野重治、宮木喜久雄の二人は、最後まで私に協力してくれた。

そういうことは知らないまま、私の助手として松原宏遠、丸山義二、塩田民夫（塩田はナウカ社員として）がはたらいてくれた。書翰集のためには故村山籌子が長いあいだむきなき協力をつづけてくれたのがいまも忘れがたい。書翰と未刊行原稿のためには小林三吾がはたらいだ。三吾のかげには斎藤次郎その他の小林の旧友がはたらいてくれたのだが、その時は名を秘していて十数年後になつてわかつた。

そして、ふりかえつてみると小林全集刊行の過去のたたかいは、これに参加してはたらいた多くの人々の内、私をはじめ、党員でない者が中心となり、党員はそれに助力する格好で推進されたのが特徴である。

それらの点も幸いに正常な形にうつされる時がきて、全十一巻、別

冊二巻という小林多喜二全集の決定版が世に出るはこびとなつたことは、祝福にたえないのだけれど、私にはいまになつてこの立派な全集をみることのできない杉本良吉、池田寿夫、村山籌子らの幻がなつかしくてたまらない。

「小林多喜二全集月報（三）」所収

## あるときの小林多喜二

徳 永 直

それが秋だつたか、冬だつたか、思いだせないけれど、彼が北海道から上京してきてから、そう永くは経つてない頃だつた、といふことは、記憶のぜんたいとしてわかる。私が巣鴨の、空蝉橋のちかくに住んでいたころで、棟割りになつてゐる一階で、私の家をはじめてたずねてきてくれた彼と話していた。

「ぼくを、労働者のところへ、つれていくつてくれないかネ」

あぐらをかいたからだを、前こごみにして、そつぜん、と彼がいつた。

「印刷労働者しか知らないよ」

と、いう意味をこたえると、ああ、いいよ、というふうに、うなづい

た。

それから、ちょツと首をかしげたりして、ためらうふうがあつて、  
「みんな……」  
と、いつた。みんな、あれでいいのかな、という意味のことをいつた。みんなとは、当時の作家同盟の人々のことと、つまり、労働者とはなれて生活しているようだけれど、いいのかな？ という意味であつた。

なんと、そのとき私がこたえたか、おぼえないけれど、彼は北海道での、彼のしきたり、労働者との接しよくしている容子、といつたものを、ちょツと話した。

それから数日たつてからだと思うが、彼を案内して、労働者の文学サークル（べつに名前があつたと思うが、性質はそんなもの）の集りへいつた。全協の出版印刷の、若い文撰工—I君というのが連絡してくれて、私の家から二三丁しかない、巣鴨刑務所の辯にちかい、古い二階家にゆくことになつていて。

もう暗かつた。電灯がついていて、軒下のくらがりから、坊主頭のI君がでてきて、金属の連中もあつまつてゐる、私につげた。I君には、前もつて小林もゆく、と話してあつたから、彼がそうしたのかも知れない。

二階の室には二十人くらいいた。私の知らない顔もたくさんあつた。一緒にあがつてゆくと、みんな小林をみた。そこで彼を紹介したのは、私ではなかつたと思う。

「——三・一五の作者——」

という、誰かの紹介にあつた言葉が、ざわつと、一座をうごかして、赤いショールをひざにのせている女の人们が、いざまいなおした顔つきを、いまもおもいだすことが出来る。

小林は最初、壁にはりつくようにしてすわつていてが、私が小便におりて、軒外で見張りをしているI君と、ちよと話してから、二階にもどつてゆくと、もう、小林の笑い声が、階段のところまできこえてきた。

空気がいつぺんに變つていて。小林は、煙草のさきが、鼻の頭にくつつくように、上むきにくわえて、雪のつもつたかさを示すふうに、片つぼの手をてのひらを下に、たかくあげて、しゃべつていて。壁ぞいの、ちかくの人々は、そつちへ首をのばしたり、女の連中では、笑い声をシヨールでおさえているのもいた。

その晩、彼が何の話をしたか、おぼえないけれど、そのときは、北海道の風物、労働者のくらしのことを、語つてたことだけ、よく記憶している。そして、私がちよと便所におりたあいだに、最初の、あの緊張した空気が、たちまちに變つて、小林が、いつの間にか、労働者たちの仲間にはいつてしまつてゐるが、印象にのつてゐる。

それから、それより前だつたか、後だつたか、彼を大塚駅へおくりがてらゆく途中、省線線路の土堤のうえを歩いたとき「太陽」何とかいう、印刷のインクを製造する工場だつたと思うが、土堤むきに、ちようど窓があいていた。二人でのびあがつてのぞきこんでから、私がゆこうとすると、とつぜん、小林の——よう——というのが、きこえた。ふりむくと、窓越しに、彼は笑いながら、工場の中の人々へ、手をふつてみせているのだつた。 （一九四九年三月）

「小林多喜二全集月報（六）」所収

・広告等は省略した。

・月報(一)(二)(四)には年譜が掲載されている。

・月報(一)(二)のみ発行日の記載がある。(三)以降の発行日は

全集奥付の記載に拠っている。

月報(二) 一九四八年九月一日発行(第二巻)

小林多喜二全集の発刊にあたつて 藏原 惟人  
ささやかな思い出 壱井 栄 一~二  
一~三

月報(二) 一九四九年二月一〇日発行(第三巻)

小林多喜二の今日における意義 宮本百合子  
あのとき 土方 与志 一~二  
二~四

\*第三巻奥付では二月二〇日発行

月報(三) 一九四九年六月三〇日(第九巻)

小林多喜二の評論その他 宮本 顯治  
「小林多喜二全集」の歴史 貴司 山治 一~二  
二~四

月報(四) 一九四九年九月一〇日(第七巻)  
感想と思想出 なかの・しげはる 一~二

月報(五) 一九四九年九月三〇日(第六巻)  
正しいアドヴァアイス 江口 涣 一~二

「爪立ち」についての雑感

月報(六) 一九四九年一月三〇日(第一巻)  
多喜二についての小さな感想 壱井 繁治 一~二

あるときの小林多喜二 德永 直 二~三

月報(七) 一九五〇年三月二〇日(第四巻)  
汚辱の歴史 岡本 健蔵 一~二  
序曲(\*詩)

月報(八) 一九五〇年七月三〇日(第五巻)  
「安子」について 岡本 健蔵 一~二  
二月二十日をめぐる感想 佐多 潤 一~二

月報(九) 一九五〇年九月三〇日(第六巻)  
松本 正雄 一~二  
稻子 一~二

月報(十) 一九五一年一月三〇日(第七巻)  
松本 正雄 一~二  
稻子 一~二

月報(十一) 一九五一年三月三〇日(第八巻)  
佐多 潤 一~二  
稻子 一~二

月報(十二) 一九五一年五月三〇日(第九巻)  
正雄 一~二  
稻子 一~二

月報(十三) 一九五一年七月三〇日(第十巻)  
正雄 一~二  
稻子 一~二